

令和7年度全国学力学習状況調査の結果 京都市立小野小学校

4月17日に、本校6年生67名を対象に実施された「全国学力調査」について、結果がまとめました。本調査は、国語と算数の2教科のテストと同時に、家庭での過ごし方や学習時間を問う調査も実施されており、生活習慣と学力との関係など、本校の子どもたちの状況をお伝えします。



総合結果(国語・算数・理科)

3教科とも全国平均を上回る結果になりました。国語科・理科に関しては全国平均を6%ほど上回る結果になり、算数科に関しては全国平均を1%ほど上回る結果になりました。

国語科より

国語科は、全国平均と比べ全ての領域で正答率を上回ることができ、全体的によくできていました。特に「書くこと」「読むこと」の領域で正答率が高かったです。「書くこと」に関しては、目的や意図に応じて簡単に書いたり詳しく書いたりする設問で回答率が高く、「読むこと」に関しては、目的に応じて必要な情報を見付けながら読むという設問で回答率が高かったです。いずれの領域に関しても、モジュールタイムの中で、新聞の記事をもとに、必要なことを読み取ったり、問い合わせして自分の考えを書いたりする取組を継続して続けてきたことが成果として表れているように思います。引き続き、資質・能力の向上を図れる取組を続けていきたいです。

算数科より

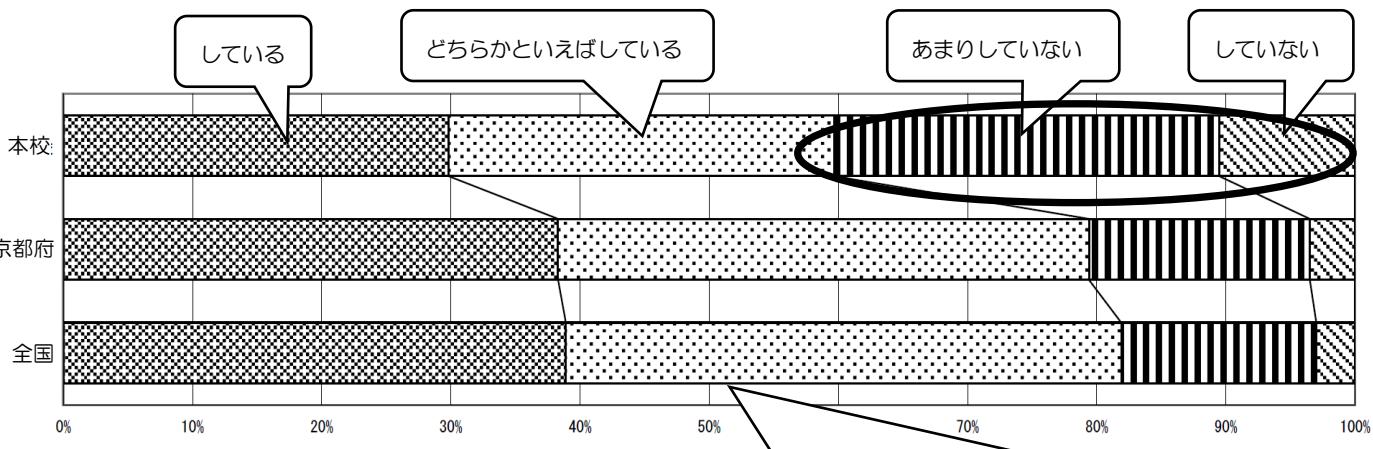
算数科は、全体的にほぼ全国平均と同じ正答率でした。正答率の高かった領域は、「図形」や「データの活用」の領域でした。「図形」の領域では、角の大きさに関する設問で正答率が高く、「データの活用」の領域では、目的に応じて適切なグラフを選択したり、グラフから必要な数値を読み取って問題に答えたりする設問で正答率が高かったです。一方、正答率が低かった領域は、「数と計算」の領域の異分母の分数の計算でした。子どもたちが主体的に学習を進められた内容については、比較的正答率が高かった結果になりました。今後も、子どもたちが主体的に取り組める学習を目指して日々の授業を進めていきたいと思います。また、定着していないものに関しては、繰り返し取り組むことで定着を目指していきたいです。

理科より

理科は、全国平均と比べ正答率が上回った領域が多かったです。領域別では、「生命」と「地球」を柱とする領域の正答率が高く、「エネルギー」を柱とする領域の正答率が低い結果でした。実験や調べたことから結果を見出し、結果をもとに考察までしっかりできた内容に関しては全体的に正答率が高い傾向になり、実験結果がうまく得られず実感を伴った考察が難しかった内容に関しては正答率が低い傾向になっているように感じます。得た情報や結果を様々な視点から考察することを大切にしていくことで、学びが深まるようにしていきたいと思います。

児童質問紙調査から①

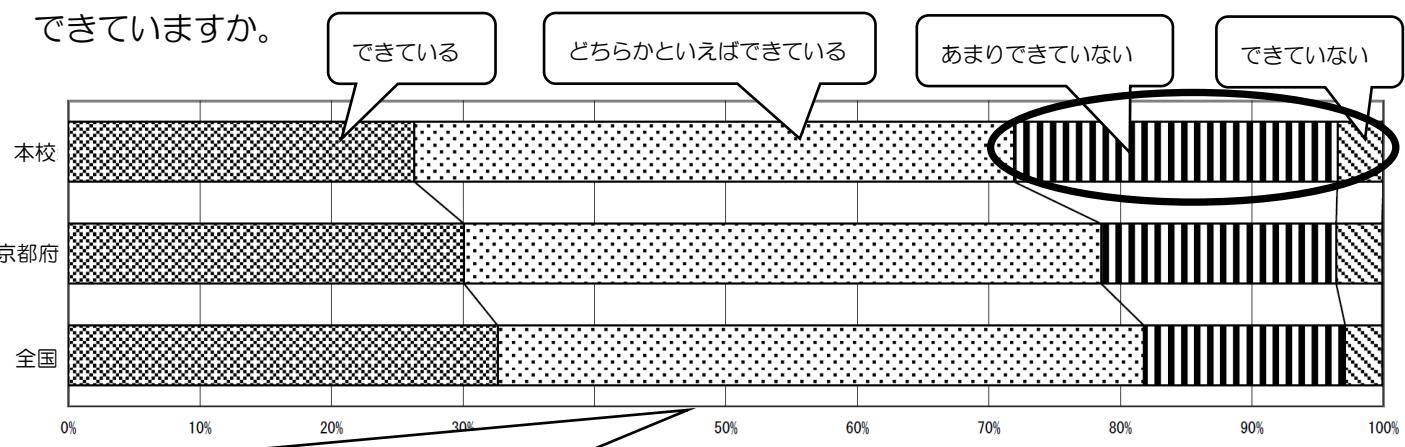
Q 毎日、同じくらいの時刻に寝ていますか。



「毎日、同じくらいの時刻に寝ていますか。」という質問に、約60%の児童が「している・どちらかといえばしている」と回答しているのに対して、約40%の児童が「あまりしていない・していない」と回答しています。習い事等の影響もあり実際には難しいことなのかもしれません、京都府・全国平均と比べると、「している・あまりしていない」と回答した児童の割合が約20%下回る結果になっています。規則正しい生活が子どもの健全な発育を支える一要因になると言われていることを考えれば、日々の生活リズムを少しふり返ってみるのもいいのかもしれませんね。

児童質問紙調査から②

Q 分からないことやくわしく知りたいことがあったときに、自分で学び方を考え、工夫することはできていますか。



「分からないことやくわしく知りたいことがあったときに、自分で学び方を考え、工夫することはできていますか。」という質問に、約70%の児童が「できている・どちらかといえばできている」と回答し、約30%の児童が「あまりできていない・できない」と回答しています。次期学習指導要領に向けた基本的な考え方の1つに、予想困難な時代において「自らの人生を舵取りできる力」が不可欠になりつつある、という記載がされています。今後、自分で学び方を考えたり、工夫したりする力はとても必要になってきます。子ども自身もそうですが、周りの大人もそのような視点をもって子どもたちと接することもまた大切になってくるように思います。